

佐潟周辺における地域活動の実態分析

齋藤, 浩志郎 / SAITO, Koshiro

(出版者 / Publisher)

法政大学大学院デザイン工学研究科

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学大学院紀要. デザイン工学研究科編 / Bulletin of graduate studies.
Art and Technology

(巻 / Volume)

12

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

8

(発行年 / Year)

2023-03-24

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00030252>

佐潟周辺における地域活動の実態分析

CHANGES OF CONTENT AND SYSTEM OF REGIONAL ACTIVITIES AROUND SAKATA LAGOON

齋藤浩志郎

Koshiro SAITO

主査 福井恒明

副査 高見公雄

法政大学大学院デザイン工学研究科都市環境デザイン工学専攻修士課程

Sagata Lagoon in Niigata City was registered as a Ramsar site in 1996. In the past, the area was used for irrigation, but now there is little use of the land for subsistence and livelihood. This study aims to clarify how local activities have been developed and how they have been organized until now, when "Wise Use" has been demanded.

Key Words :Community Activities, Sakata Lagoon, Niigata City

1. 序論

(1) 研究背景・目的

新潟県新潟市を中心とする越後平野には「潟」と呼ばれる湖沼が 17 あるが、かつては潟が灌漑や生活のための用排水のインフラを担っていた歴史がある¹⁾。明治初期ころに存在していた約 120 の潟は、住民らによって灌漑の水流通上のためにドロや枯れた水草を一斉清掃する「潟普請」や、水面を維持するための「ヨシ焼き」などを行うことで維持管理し、人びとと水との関係を密接なものにさせていた。現在では近代的用排水系統の整備、土地改良などを進めてきており、結果越後平野は全国でも代表的な一大穀倉地帯として発展することができたが、その一方で潟は水田化・宅地化のための干拓が進行し、第 2・3 次産業への主産業の移行や人びとのライフスタイルの変化の進行による農村集落の都市化によって、古来より続いてきた新潟特有の潟を中心とした人びとと水の関係は希薄化していったといえる。

そのなかで残された潟やその周辺水田耕地について、越冬のために渡ってくるガン類等にとって重要な湿地であることが認知されるようになり、1996 (平成 8) 年には佐潟が国内 10 番目となる「ラムサール条約 (特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約)」に登録された²⁾。これにより佐潟は施策的に自然環境保全が行われることとなり、ワイズユース (賢明な利用: 湿地の生態系を維持しつつそこから得られる恵みを持続的に活用すること) とその普及啓発が求められるようになった。さらに 2022 (令和 4) 年には新潟市がラムサール条約湿地自治体に認証され³⁾、越後平野全体での自然環境保全とワイズユースを推進することを掲げている。そのような中、潟

周辺では野鳥観察や清掃活動などの新たな地域活動が見られ始めている。生業・生活上必要な行為としての潟での人間の介入がなくなった現在、それらをどのように位置づけを行い、組織化していくかが今後の課題であると言える。

それを受け、本研究ではラムサール条約登録から 26 年が経過している佐潟周辺における地域活動の展開を把握しながら、活動体制の実態とその形成要因を明らかにすることを目的とする。

(2) 既往研究

社会的な活動の展開や体制について着目している研究としては一定の蓄積がみられる。田中(2020)⁴⁾は熊本県菊池市の菊池川流域川づくりと街づくりの変遷をまとめるとともに、かわまちづくりにおいては複数回にわたるワークショップで多様なステークホルダーが参加し、各々の活動の多様性を認め合いながら計画の合意形成を図ることができているという構造を明らかにしている。

また活動と空間の相関関係について着目したものとして、藤倉ら(2010)⁵⁾の研究がある。長野県開田村を対象に、航空写真や現地視察による景観構成要素の調査と、ヒアリングによる社会的活動諸相を整理し、それらの相関構造を空間的・活動的まとまりで図化し、2 年代での変化を分析するとともに、人びとと地域社会の多様な所有・維持管理、補助金によって成立している地域景観自体が、社会的活動の体制に影響を及ぼしているという内的システムを考察し、その全体像を明らかにしている。山崎ら(2015)⁶⁾は、恵庭市漁川にかかる関連施策から沿川の土地利用をゾーン分けした上で、各ゾーンの景観構成要素・景観形成基本方針をまとめるとともに、そこで行われている住民活動の実態や枠組みに

ついて整理し、住民活動が良好な景観まちづくりに寄与していることを評価しながら、施策の範囲設定や内容がそれにそぐわない実態を指摘した。

また新潟市越後平野を対象とした研究で、佐々木ら(2018)⁷⁾は、新潟市内にある佐潟と福島潟の2つの潟を取り巻く市民活動に着目し、各潟のあらましと地域活動団体の概要の整理を行いながら、従来とは異なる産業・環境・社会背景から人と潟の新たな関係性が発現していることや、市民活動をインフラマネジメントの主体として捉えその特徴・意義を明らかにしていくための論考を行っている。渡邊ら(2019)⁸⁾は福島潟に関連する事業・整備の背景にある関心・目的の変遷を整理するとともに、利活用や維持管理に関わる市民活動のテーマ・空間の分布の関係から、各主体が潟の機能や価値を考察している。

本研究では佐々木らや渡邊らの論点を踏襲しながら、田中らや山崎らの手法を参考に地域活動の位置付けと体制を整理し、藤倉らの視点を踏まえた実態分析へと導く。

(3) 研究方法

本研究では、まず佐潟周辺の概要と空間的特徴を把握したのち、佐潟周辺で地域活動を行っている団体・組織について概要と活動内容を文献・ヒアリングから調査する。調査結果より、活動内容の性質から類型化を行い、それらの総数と活動の開始時期・継続状況を通時的に整理し、特徴の見られる時期を区分する。つづいて、類型化した各地域活動の活動場所・参加組織について、区分した各時期で共時的にマトリックス表へ整理を行い、その特徴を分析する。以上の調査・分析を踏まえ、最後に佐潟周辺における地域活動の形成要因について考察を行う。

2. 佐潟周辺の概要・地勢

(1) 佐潟の概要

対象地の佐潟(図1)は越後平野のほぼ中央北部、新潟市中心市街地より西部の新潟市西区赤塚に位置しており、赤塚集落に隣接している。日本最大級の砂丘とされる新潟砂丘の最西端に位置し、形成期の異なる浜堤(波による堆積によって海岸とほぼ平行に形成される低い峰)列帯の間にある湖沼が佐潟である⁹⁾。南西方向にある小さな上潟と北東方向にある下潟の大小2つから成り立っており、潟の合計面積は約43.6ha、標高5m、平均水深は1m程度、湖底は舟底型になっている。外部からの流入河川がなく、周辺砂丘地からの湧水・雨水によって水が供給されている。佐潟は佐潟水門を通じて用排水路と接続されているが、現在では栄養分が高いことから農業用水としてはほぼ利用されておらず、灌漑期前の代かき等での利用時に水門が開閉されるのみである。

佐潟はラムサール条約のほか、もとより「佐渡弥彦山山国定公園(1950年制定)」「国指定佐潟鳥獣保護区(1981年指定)」によって自然環境が保護されてきている。湖底の土地所有は国、湖畔(佐潟公園)の所有は新潟市、漁業権は佐潟漁業協同組合(現在解散済)、水位操作は赤塚地



図1 佐潟(下潟)の全景



図2 佐潟周辺の土地利用等現況図

区自治会(実質的には佐潟と歩む赤塚の会が請け負い)であり、複雑な所有・管理形態となっている⁹⁾

(2) 地形地質・土地利用

佐潟周辺の土地利用や施設、地質に関する情報を整理する(図2)。西側は砂丘地帯で標高はT.P.4.0~51.0mの高地となっており、畑耕地や集落が形成されているほか、谷底部分に佐潟の水域やヨシ原が広がっている。東側の沖積平野には水田耕地が広がっており、標高はT.P.2.0~3.0mは程度である¹⁰⁾。このように佐潟付近を境に東西で地形・地質が異なり、それに合わせて土地利用が変化しているのが特徴である。越後平野ではT.P.1.0m以下もしくは海拔ゼロメートル地帯の低地帯が多くを存在していることを勘案すると、全体的には起伏に富んだ標高の高い地域であると言える。

佐潟周辺にはモニタリング・調査、水鳥保護、普及啓発の拠点として1998(平成10)年に「佐潟水鳥・湿地センター(設置:環境省、管理:新潟市)」が開館したほか、周辺一帯は2006(平成18)年に「佐潟公園(管理:新潟市)」として整備されており、自然生態観察園や野鳥観察

舎「潟見鳥」などの訪問者を受け入れるための施設を有している。集落内には西区赤塚連絡所、赤塚公会堂など地域活動を行うための公共施設が点在している。

3. 団体・組織および地域活動調査

本章では、佐潟ラムサール条約登録の1996(平成8)年以降で地域活動を行う団体・組織について、概要と活動内容を調査する。

(1) 調査対象の団体・組織

佐潟周辺において私益を伴わない公益的な地域活動を行う団体・組織のうち、第4期佐潟周辺自然環境保全計画(新潟市)、新潟市潟のデジタル博物館(新潟市)を中心に頻出する21つを調査対象とした(表1)。さらに、団体・組織の性質を考慮し4種別(表2)で分類したところ、「市民活動団体」は10つ、「行政・関連組織」は5つ、「地縁的組織」は4つ、「中間法人」は2つとなった。なお、以降の分析に向けてA1,2,3…のように予備的に通し番号を振る。

a) 市民活動団体

A1は、既存地元団体と地元住民の連携役および各種イベントの企画・運営を目的に活動しており、佐潟を中心に多種多様な地域活動を行っている。赤塚外の会員が多いことが特徴である。A2は、砂丘地帯でのまちあるきや展望台整備を通じて赤塚の魅力再発見と発信を狙う活動を行っており、新潟国際情報大学を中心に地域住民らによって構成される。A3は赤塚最古に部類する市民活動団体で、歴史・民俗、文化、地理、経済から随想に至るまで赤塚に関わる様々な調査研究を行っている。A4は、郷土研究会で積み上げた成果を来訪者へ発信する目的でまちあるき・案内を行っている。A5は集落内の重要文化財「中原邸」を主体的に整備し一般公開を行っている団体である。A6は、佐潟周辺の市民活動団体と行政の協働でガイドブックを製作する団体である。A7は野菜販売や講習会、ギャラリー等を地元住民主体で行っていた組織である。A8は、多面的機能支払交付金制度(農林水産省)を利用して、地域住民で農地振興と維持管理の促進を行う組織である。A9は湿地センターの適切な活用を図ることと自然保護に対する理解を深める目的に活動を行っている。A10は水辺での活動を通じてあるべき水辺の姿を模索する団体で、専門性の高い会員を有する。

b) 行政・関連組織

B1は環境部環境政策課、西区地域課、西区農政商工課を中心に各課の役割に応じた活動を展開している。特に西区農政商工課は事実上の観光に関わる窓口として機能している。B2は保全計画から具体的取組みへの推進のために多くの人の参画を意図しており、毎年1~2回の佐潟に関連した議会を行っている。毎回地域住民、市民活動団体、学識経験者、行政機関で構成され、事実上の母体は新潟市環境部環境政策課となっている。B3は新潟市内の潟の自然環境を保全と魅力・価値の発信のために、調査研究、

表1 調査対象団体・組織

	名称	種別	その他	創設年
A1	佐潟と歩む赤塚の会	市民活動団体		2002(平成14)年
A2	新潟砂丘遊々会	市民活動団体		2017(平成29)年
A3	赤塚郷土研究会	市民活動団体		1981(昭和56)年
A4	赤塚・佐潟歴史ガイド	市民活動団体		2013(平成25)年
A5	赤塚・中原邸保存会	市民活動団体		2008(平成20)年
A6	赤塚・佐潟地帯研究会	市民活動団体		2017(平成29)年3月
A7	佐潟村	市民活動団体		2007(平成19)年
A8	フコデあかつか 農地・水・環境保全管理協定	市民活動団体		2007(平成19)年
A9	佐潟ボランティア解説員の会	市民活動団体		1998(平成10)年
A10	新潟水辺の会	市民活動団体	特定非営利活動法人 旧:新潟の水辺を考える会	1987(昭和62)年
B1	新潟市	行政・関連組織		
B2	佐潟周辺自然環境 保全連絡協議会	行政・関連組織		2006(平成15)年
B3	新潟市潟環境研究所 (新潟ネットワーク会議)	行政・関連組織		2014(平成26)年4月
B4	佐潟水鳥・湿地センター	行政・関連組織		1998(平成10)年5月
B5	西区自治協議会	行政・関連組織		2007(平成19)年4月1日
C1	コミュニティ佐潟	地縁的組織		2006(平成18)年3月25日
C2	赤塚地区自治連絡協議会	地縁的組織		不明
C3	赤塚地区自治会(旧赤塚村)	地縁的組織		推定1611(慶長16)年ころ
C4	新潟市立赤塚中学校	地縁的組織	学校設置者は行政(新潟市)であるが社会的活動の性質の観点から地縁的組織とする。	-
D1	佐潟観光協会(赤塚商工会内)	法人	旧:赤塚観光協会	1972(昭和47)年
D2	赤塚漁業協同組合	法人		1955(昭和26)年

表2 団体・組織の種別

	種別名	内容
A	市民活動団体	市民が中心となって、自発的・自主的かつ非営利(利益を求めない)で公益的(不特定多数のための利益)な活動を行う団体。ボランティア活動を行う団体のほか、NPO法人も含める。
B	行政・関連組織	市区町村を統括する行政機関、かつ行政機関によって設立された団体・組織。
C	地縁的組織	町又は字の区域その他市町村内の一定の区域に住所を有する者の地縁に基づいて形成された団体。
D	中間法人	営利を目的とはしないが、積極的に公益を目指すわけでもない団体のうち、特別法によって法人格を認められた団体。

ネットワークの構築、情報発信、窓口機能を担う組織で、現在はネットワーク会議のみが継続している。B4は鳥類の観察や湿地保全啓発の拠点として機能しており、「佐潟通信」発行やインターネット上での情報公開を通じて、佐潟の現状を継続的に発信する組織でもある。B5は佐潟含む西区内の各地域コミュニティと行政が協働することで、住民自治の推進を図る組織である。

c) 地縁的組織

C1は住民と行政が協力して地域課題に取り組むことを目的に、赤塚周辺地域の諸自治会、団体、小学校PTAなどで構成される団体である。C3は赤塚集落内の最も基本的な自治会単位で、C2は旧赤塚村の由縁のあるC3や隣接集落の自治会で構成される協議会である。C4は1986(昭和61)年からハクチョウの保護・観察を行うほか、生徒会主催で佐潟周辺の地域活動を行うなど、中学校区としての枠組みを活用した活動を行っている。

d) 中間法人

D1は佐潟まつり等の地域の大規模イベントの主導・広報を行う組織である。D2は戦後より組織された、佐潟周辺での漁業関連を総括する歴史ある組合で、佐潟の水域に係る地域活動を中心に協力・参加していたが、組合員の高齢化等を理由に2022(令和4)年ころに解散し、A1がその一部の役割を引き継いでいる。

(2) 地域活動調査

以上の各団体・組織が行う地域活動について調査を行う。

表 3 地域活動調査に使用した主な調査資料一覧

発行者	資料・サイト名
新潟市	佐潟周辺自然環境保全計画 ¹¹⁾
新潟市	佐潟周辺自然環境保全連絡協議会 記録・配布資料、第 25 回～第 35 回 ¹²⁾
新潟市	過去の佐潟周辺自然環境保全連絡協議会の記録 (第 1 回～第 24 回) ¹³⁾
新潟市	佐潟 20 ラムサールフェス ¹⁴⁾
新潟市	潟のデジタル博物館(お知らせ) ¹⁵⁾
新潟市	コミュニティ協議会だより「コミュニティ佐潟だより」 ¹⁶⁾
新潟市	コミュニティ佐潟「活動計画・実績」 ¹⁷⁾
新潟市西区	西区自治協議会 ¹⁸⁾
新潟市西区	佐潟水鳥・湿地センター ¹⁹⁾
新潟市	佐潟通信 ²⁰⁾
新潟水辺の会	新潟の水辺だより ²¹⁾
公益財団法人 あしたの日本を 創る協会	自治会町内会情報誌 まちむら, vol.159, pp.16-18, 2022.
佐潟と歩む 赤塚の会	Facebook ²²⁾
磯貝尚輝	社会的共通資本としての砂丘 ～まちづくりからひとづくりへ～ 2018 年度新潟国際情報大学卒業論文, 2019.

調査方法は活動誌, SNS, 広報等を対象とした文献調査(表 3)を基本とし、一部補足的にヒアリング調査を行いながら整理を行った。調査項目は活動日時、活動名、活動内容、参加人数(わかる場合)、活動場所、関連主体、参加形態(主催・共催・協力・委託・参加の別)、一般参加の可否、である。なお、同一の活動名の場合でも団体・組織ごとで活動内容や参加形態が異なる場合があるため、内容に応じて重複して整理を行っている。調査の結果、1996～2022(平成 8～令和 4)年の間に少なくとも合計のべ 1,766 件の地域活動が確認できた。一般参加の可否、活動頻度および関係団体・組織の整理から活動規模の大きい 39 の代表的な地域活動について表 5 に示す。

4. 地域活動の通時的

(1) 地域活動数の類型化

3(2)で調査した各地域活動の内容等から判断できる活動の性質として「Ⅰ：環境寄与・維持管理型」「Ⅱ：体験学習型」「Ⅲ：風景体験型」「Ⅳ：産物享受型」「Ⅴ議論計画型」の 5 項目で類型化を行った(表 4)。

(2) 地域活動数の変化

各年度における活動類型ごとの活動数を示す(図 3)。全体の推移を見ていくと、2000 年度には 7 件から 32 件へ増加しており、このうちⅡ型の 1 件から 20 件への増加が活動数の底上げにつながっている。その後、2006 年度まではゆるやかに増加していくが、2007 年度で 53 件から 80 件への大幅な増加が見られる。この年度にはⅢ型の 0 件から 6 件へ増加したほか、Ⅴ型が 9 件から 21 件まで増加したことが影響している。その後、各年度で若干の増減

表 4 地域活動の性質の類型

活動類型	内容	キーワードの例
Ⅰ：環境寄与・維持管理型	地域の環境や生態系に直接関与しており、環境維持や生態系の保全に貢献している、もしくはその可能性がある活動。	清掃 掃除 ゴミ拾い 作業 整備
Ⅱ：体験学習型	地域の自然・文化の体験もしくは学習の場としての機会となっている活動。	体験 学習 観察 ワークショップ つくる 作成 制作 展示
Ⅲ：風景体験型	地域の風景そのものに価値を見出し、魅力の発見や関心の醸成を図る活動。	まちあるき ウォーキング
Ⅳ：産物享受型	地域の資源やそれを利用した産物を通じて、地域の自然・文化を間接的に触れる機会を設けている活動。	利用 活用 食べる 楽しむ 発信 PR
Ⅴ：議論計画型	地域の環境や自然、文化の保全・利用などについて議論・計画を行う機会となっている活動。	計画 議論 会 ワークショップ シンポジウム

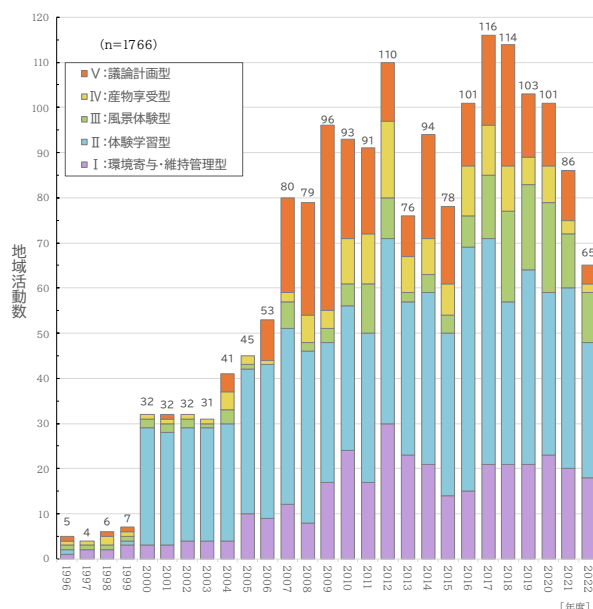


図 3 活動類型別地域活動数の推移

はあるがおおよそ 100 件前後で推移していくことがわかる。以上、地域活動数の特徴的な変化から、1996～1999 年度、2000～2006 年度、2007～2022 年度の 3 時期でまとまりがあることが確認できた。

(3) 地域活動と団体・組織の継続状況

3(2)で調査した活動日時や 3(1)で調査した団体・組織の創設年等の情報から、ある程度の規模が確認できた代表的な地域活動や団体・組織の継続状況について、通時的に整理を行う(図 4)。

4(2)で確認した時期をもとに、1996～2006 年度についてみる。活動項目は多くないものの、Ⅰ型の佐潟クリーンアップ活動「潟普請」やⅢ型の佐潟自然散歩・佐潟単調散歩など、現在まで安定して継続している活動が多く、活動の基盤となっている。また A1, A9, B4 がこの時期で創設されるものの、依然として既存の団体・組織が多く占める時期となっている。以降の展開についてみると 2007 年度前後を境に、Ⅰ・Ⅱ・

表 5 代表的な地域活動の諸元

地域活動名	活動頻度	市民活動団体										行政・関連組織				地縁的組織				法人		実施委員会	補助金・制度
		A1	A2	A3	A4	A5	A6	A7	A8	A9	A10	B1	B2	B3	B4	B5	C1	C2	C3	C4	D1	D2	
佐潟ハス採り大会	■	●									●												
佐潟グリーンアップ活動(湖岸部)	■	●									●												有
佐潟グリーン活動	□	●																					有
下の復元	△																						有
清掃活動	□	○																					有
(草刈り・水門下ドロ上げ・ヨシ取り)	□	○																					有
菜の花プラン	△																						有
稚魚放流	■	●																					
ハス復活プロジェクト	■	●																					
佐潟地元学	□	○																					有
ラムサールシンポジウム	■	△																					有
佐潟10ラムサールフェスティバル	■	△																					有
佐潟20ラムサールフェスティバル	■	△																					有
湖シンポジウム	■	△																					
中原邸一般公開	■	●																					有
ぼくとわたしの夏休み	■	●																					有
赤塚郷ゆめ文の文庫	■	△																					有
秋の虫を探しに行こう!	■	●																					有
佐潟探検隊(さかたん)	■	○																					有
夏休み佐潟昆虫観察会	■	●																					
佐潟市民探鳥会	■	●																					
佐潟自然散歩・佐潟探鳥散歩	■	●																					
小鳥さえずる佐潟で春散歩	■	●																					
水辺のいきもの観察会	■	●																					
初夏の植物観察会	■	●																					
冬鳥ウォッチング	■	●																					
湖舟体験	□	○																					
ナイトハイク	■	△																					
砂丘ウォーキング	■	●																					
佐潟まつり	■	●																					有
佐潟春まつり・桜まつり	■	△																					有
佐潟冬まつり・佐潟鯉まつり	■	●																					有
ワークショップ・もの語り	■	△																					
佐潟文化祭	■	●																					
水と土の芸術祭2018	■	△																					有
佐潟周辺自然環境保全連絡会議	■	●																					
西区自治連絡協議会	■	●																					
里潟ネットワーク会議	■	○																					
意見交換会(佐潟関連)	□	○																					
赤塚ガイドブック	■	△																					有

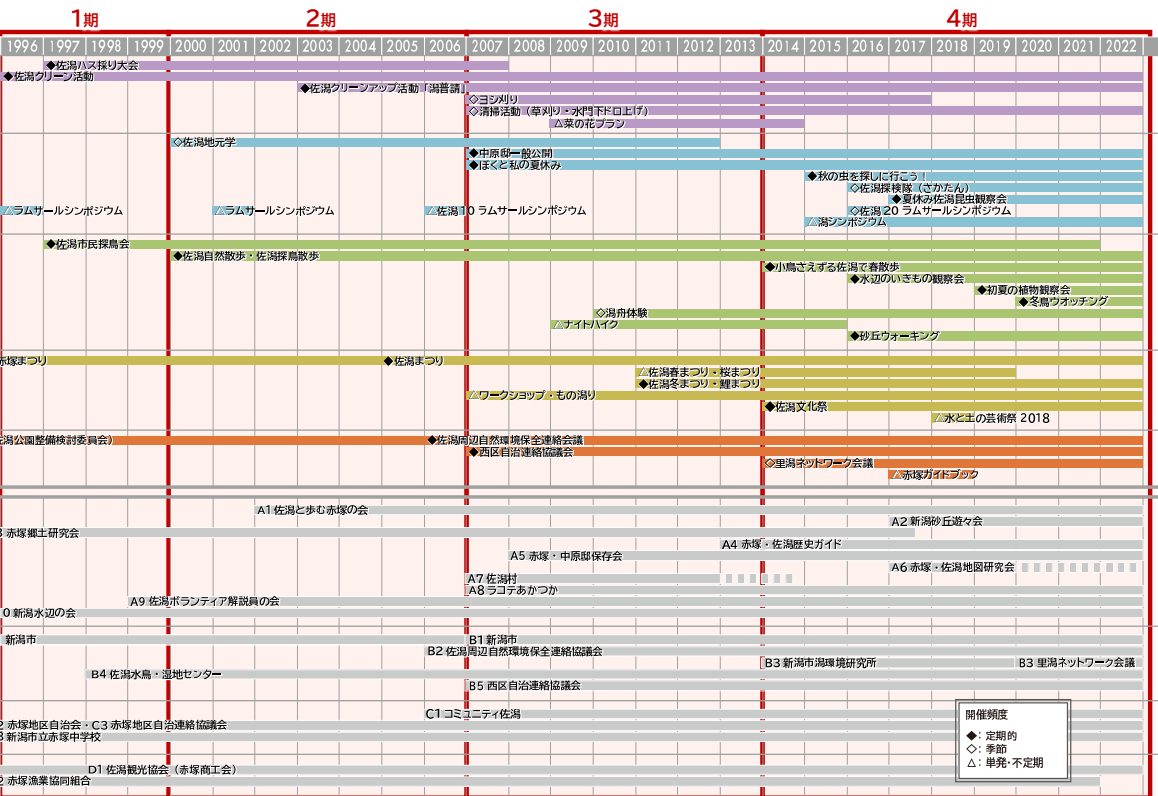


図 4 代表的な地域活動および団体・組織の継続状況

Ⅲ・Ⅴ型の活動項目と団体・組織が増加しているほか、2014年度前後においてもⅡ・Ⅲ・Ⅳ型で活動項目数の増加が見られ、各類型の地域活動が多様化したことがわかる。

(4) 時期区分

以上、地域活動数と継続状況の整理より、地域活動の展開には、(1)1996～1999年、(2)2000～2006年、(3)2007～2013年、(4)2014～2022年、の4時期でまとまりがあることが確認できた。

5. 各期における地域活動の体制

本章では4(4)で区分した各時期について、地域活動が行われている空間および参加団体・組織についてマトリックス表にて共時的に整理し、その特徴を見る。

(1) 1期(1996～1999年)

1期の地域活動の体制を示す(図5)。Ⅰ型について、当時の佐潟ではハスの過剰増加によって水面が縮小し、水鳥の生息へ影響が懸念されており、ハスを刈り取ることで水面を広げる『佐潟ハス取り大会』がA10によって行われた。また湖畔ではC4を中心にゴミ拾いを行う佐潟クリーン活動が行われている。

Ⅲ型ではB1主催で野鳥の記録や観察を行う『佐潟市民探鳥会』も行われ、佐潟の湖畔を中心とした個々の地域活動が行われ始めた。一方、ラムサール条約登録を受け、記念のシンポジウムや、公園計画の見直しが行われているが、関係団体・組織はA10、B1のみにとどまっている。

(2) 2期(2000～2006年)

2期の地域活動体制を示す(図6)。この時期ではⅠ型で明治期までに赤塚集落で行われていた、灌漑期直前の清掃活動「潟普請」を参考に現代版として復元した、『佐潟クリーンアップ活動「潟普請」』が始まり、水域でのドロ上げやヨシ原でのヨシ刈りなどが行われることで、佐潟全体を網羅するようになった。これはA1の主催で行われるが、多くの団体・組織が活動に参加するようになり、のちに実行委員会を設置するまで発展する。Ⅱ型ではシンポジウムが複数開催されるほか、佐潟の歴史や自然環境について学習する講座型の『佐潟地元学』が開始し、ラ

ムサール条約や地域について専門的な情報を通じて知ることができる項目が増加した。

Ⅲ型ではB4の協力のもとA9が主催し、湿地センターから湖畔にかけて自然観察や解説を行う『佐潟自然散歩・佐潟探鳥散歩』が始まった。さらにⅣ型の『佐潟まつり』では旧来から続く地域の祭りの発展型として、湖畔での屋台村や水域での多数の手作り燈籠を浮かべる万燈籠などが展開されるようになった。このよう到来訪者へ潟環境をPRするような活動項目が増加したのが特徴である。

(3) 3期(2007～2013年)

3期の地域活動体制を示す(図7)。Ⅰ型について、佐潟公園での『菜の花プラン』、水田耕地での『清掃活動』によって活動範囲が拡大したほか、C1、C2を中心とした水域、ヨシ原『清掃活動(ヨシ刈り・ドロ上げ)』や『浚渫』『ド(かつて佐潟内にあった、湧水から流れが続く水路)掘削』など、活動項目数、関係団体・組織ともに増加している。この時期では佐潟の富栄養化や植物相の変化などがあり、これらに対応する対策としての活動が増加したことがわかる。またⅤ型で、B1を中心に市民活動団体や地縁的組織、中間法人など多様な団体・組織が参加する『佐潟周辺自然環境保全連絡協議会』が行われ、佐潟の現状についての情報共有や、Ⅰ型の取り組みについて調整や意見交換がされるようになり、地域活動に対する協議体制が取られるようになった。

Ⅱ型では『佐潟地元学』『観光ボランティア養成講座』を受講した有志らによって、湿地センターから赤塚集落を解説しながら巡る『まちなみ散策』や、要人の中原家の邸宅を整備・公開する『中原邸一般公開』が行われるようになり、具体的な地域活動の展開が見られるとともに、地域の歴史を来訪者へPRする活動項目が増加した。Ⅲ型では、かつて集落の水の上での移動手段として利用されていた潟舟を活用し、水域から潟の風景を楽しむ『潟舟体験』がA1によって行われ始めた。Ⅳ型ではA1、D2の協力による鯉漁・鯉汁調理を行う『佐潟冬まつり・鯉まつり』、春期の佐潟の自然を楽しむ『佐潟春まつり・桜まつり』、佐潟の植物などを利用してリースづくりなどを行う『ワ

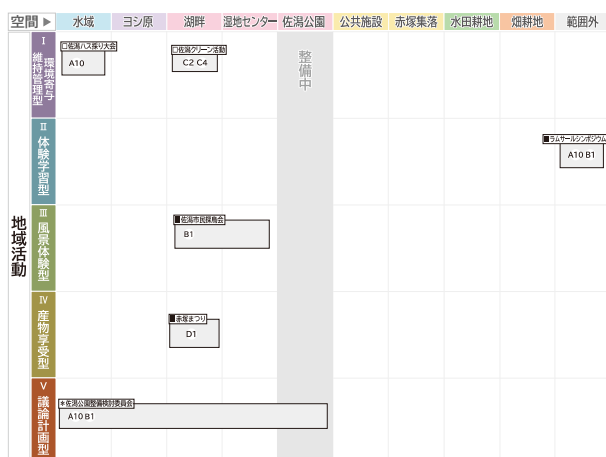


図5 1期(1996～1999年)の地域活動の体制

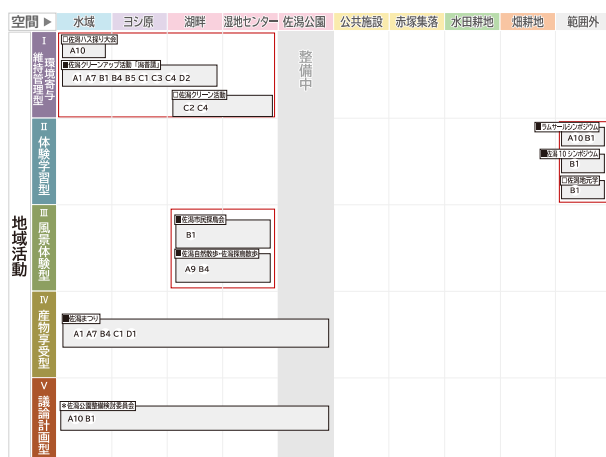


図6 2期(2000～2006年)の地域活動の体制

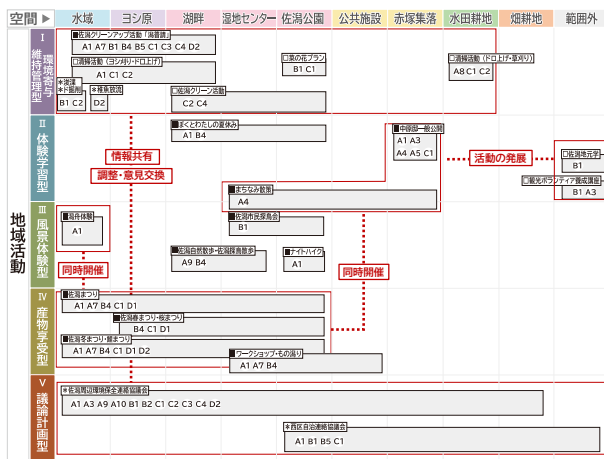


図 7 3期(2007～2013年)の地域活動の体制

ークショップ・ものゝり』など、活動項目の増加とともに内容が多様化したことが読み取れる。また、Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ型では同時開催するなど活動間の連携が行われるようになり、複数の地域活動を一体化する動きがあったのが特徴である。

(4) 4期(2014～2022年)

4期の地域活動の体制を示す(図8)。Ⅱ型の『ぼくとわたしの夏休み』『佐潟探検隊(さかたん)』、Ⅲ型の『小鳥さえずる佐潟で春散歩』など、A9やA1とともにB4が関係する活動項目の増加と多様化が見られる。

I型について、水域のハスが激減したことを受け、A1が中心となって湖畔や湿地センターにてハスの発芽・移植を行う『ハス復活プロジェクト』が行われており、課題に対する市民活動団体の即時的な活動が見られる。

Ⅳ期では『水と土の芸術祭2018』の一環として、A2らによって手づくりの展望台(見晴らしの丘展望台「遊々亭」)を整備したほか、湿地センター・佐潟公園での芸術祭の催事と連携して『砂丘ウォーキング』を開催している。またⅤ型の『赤塚ガイドブック』では、これまで各々でまとめていた佐潟周辺の見どころについて、各団体・組織間の調整で体系的に整理され、佐潟・赤塚集落のみならず、これまで着目されてこなかった水田耕地・畑耕地も地域資源としてPRを行うようになった。このように、佐潟周辺一帯が地域活動のフィールドとして拡大してきたことが特徴である。

6. 地域活動の形成要因に関する考察

(1) ラムサール登録による外部からの注目

地域活動の初動は、ラムサール条約登録を受けたことによる佐潟のブランド化が考えられる。それまで佐潟は近隣の市民らのみが来訪する比較的閉鎖的な空間として見られていたが、水鳥の生息上、国際的な価値があることが評価されたことで地域内外からの注目を集めることとなった。これにより佐潟の来訪者が増加を見越し、ハスの過剰増加や湖畔のゴミ問題など、直接風景に影響する地域

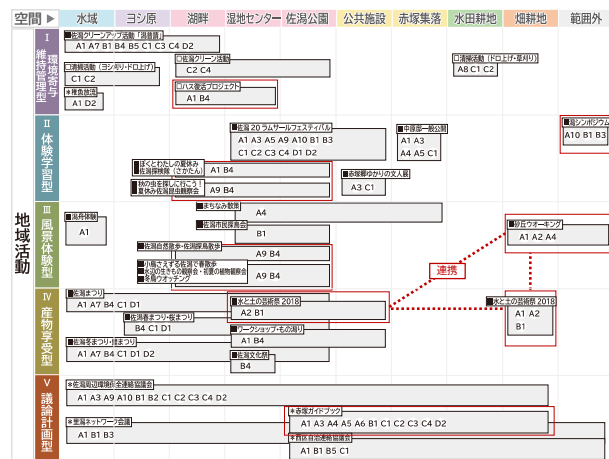


図 8 4期(2014～2022年)の地域活動の体制

課題や、生息する水鳥の現況把握の必要性に対して、即時的に対応した結果、外発的に地域活動の形成へつながったことが考えられる。

(2) 専門家の介入・地域研究の蓄積

シンポジウム等では保全・利用についての事例や佐潟の生態系、自然環境の現況について専門家の立場から見解が示され、市民に対して潟とどのように関わっていけば良いかを議論・思索する機会となっていたことが考えられる。また、歴史民俗・地形地質、などの研究成果について佐潟地元学や佐潟周辺自然環境保全連絡協議会等を通じて市民へ共有する機会が設けられており、それまで発見しづらかった地域の魅力や課題について外発的に意識する機会が増加したことが考えられる。これらはいずれも行政関連組織が仲立ちすることで、実働部隊としての市民と佐潟の経過を注視する専門家の相互で効果的な働きをするような役割を担い、環境寄与・維持管理を目的とした地域活動の体制の形成につながったと見られる。

(3) 地元の外部発信の意識への高まり

6(2)から発展し、地域のもつ魅力について市民らで一定の枠組みで共有されるようになり、それらを活用した地域活動を展開することで外部への発信を行おうとする意識が高まったことが考えられる。佐潟の認知度が高まる一方で、環境寄与・維持管理を目的とした活動は外部からの参加ハードルが高い。そこで風景体験や産物享受のような参加のしやすい地域活動を通じて、佐潟への来訪のきっかけを創出するとともに、地域外からの潟への興味・関心の受け皿を作ろうという、地域の内発的な意識が生まれたことが地域活動の形成へつながっていることが考えられる。また、これら活動の蓄積によって外部へ発信してきた個々活動内容は地域内でも共有されるようになり、団体・組織間もしくは活動間の連携などをすることで、地域活動全体が体系化したことが考えられる。

さらに2014(平成26)年度には行政関連組織の新潟市潟環境研究所が設立され、潟に関する基本情報と地域活動の広報を同時に行うようになった。これが地域の外部

発信機会の増加と地域内外からの地域活動の参加契機の増加に繋がり、結果的に地域活動の継続性に影響していることが考えられる。

7. 結論と今後の課題

(1) 結論

本研究では空間的特徴の把握と地域活動調査から以下の4点を明らかにした。

- ① ラムサール条約登録以降、佐潟周辺における地域活動は4時期にわけて構造化できる見方を示した。
- ② 地域活動は活動内容の多様化、協議体制の構築、活動間の連携とともに体系化されてきたことを明らかにした。
- ③ 活動場所は佐潟から周辺一帯へ拡大していった経緯を明らかにした。
- ④ 地域活動の形成要因として、ラムサール条約登録、専門家の介在、地域研究の蓄積、地元の外部発信への意識の高まりが挙げられることを示した。

(2) 今後の課題

今回調査に至らなかった、地域活動に参加する主体の流動について個人レベルでの調査、他の潟での地域活動調査、および今後の地域活動の展開に向けた体制・構造の提案が挙げられる。

謝辞: 本研究の調査にあたり、新潟砂丘遊々会、ラコテあかつか(赤塚地区自治会、赤塚地区自治連絡協議会)、佐潟と歩む赤塚の会、赤塚郷土研究会、西蒲原土地改良区の各位におかれてはヒアリング調査にご協力いただき、調査、分析、考察の参考とさせていただいた。この場を借りて感謝を申し上げる。

参考文献

- 1) 新潟市環境政策課：潟環境研究所「みんなの潟学」，p.1，2019。
- 2) 新潟市環境部環境政策課：第4期佐潟周辺環境保全計画，pp.1-2，2019。
- 3) 新潟市：ラムサール条約の湿地自治体認証について，https://www.city.niigata.lg.jp/kurashi/kankyo/hozen/shizenfureai/wetland_city.html，[最終閲覧日：2022/2/5]。
- 4) 田中尚人，光永和可，園田晃大：菊池市のかわまちづくりにおける参加・協働に関する研究，土木学会論文集D3，Vol.75，No.6，pp.249-257，2020。
- 5) 藤倉英世，山田圭二郎，羽貝正美：地域景観と地域社会の相関構造及び景観の内的システムの生成・発現に関する実証的研究，土木学会論文集D，Vol.66，3号，pp.394-413，2010。
- 6) 山崎嵩拓，坂井文：河川景観の特性分析に基づく景観施策及び住民活動に関する一考察 恵庭市漁川に着目して，日本建築学会計画系論文集，Vol.80，No.716，pp.2273-2281，2015。

- 7) 佐々木葉，安達幸輝，外山実咲，橋本航征，渡邊拓巳，小澤広直：新潟市における潟をめぐる市民活動の特徴，第57回土木計画学発表会・講演集，21-04，pp.1-8，2018。
- 8) 渡邊拓巳，佐々木葉：新潟県福島潟における環境整備目的の変遷からみた維持管理・利用活動の構造，第60回土木計画学研究発表会・講演集，pp.1-7，2019。
- 9) 前掲1)，p.111。
- 10) 国土交通省：基盤地図情報，数値標高モデル5mメッシュ（標高）。
- 11) 新潟市：佐潟周辺自然環境保全計画，<https://www.city.niigata.lg.jp/kurashi/kankyo/hozen/shizenfureai/sakata/shizenkeikaku/hozen.html>，[最終閲覧日：2022/2/15]。
- 12) 新潟市：佐潟周辺自然環境保全連絡協議会，<https://www.city.niigata.lg.jp/kurashi/kankyo/hozen/shizenfureai/sakata/sagata/index.html>，[最終閲覧日：2022/2/15]。
- 13) 新潟市：過去の佐潟周辺自然環境保全連絡協議会の記録，https://www.city.niigata.lg.jp/kurashi/kankyo/hozen/shizenfureai/sakata/sagata/sakata_before.html，[最終閲覧日：2022/2/19]。
- 14) 新潟市：佐潟20ラムサールフェス，https://www.city.niigata.lg.jp/kurashi/kankyo/hozen/shizenfureai/sakata/sakata20_ramsar_fes.html，[最終閲覧日：2022/2/19]。
- 15) 新潟市：潟のデジタル博物館，お知らせ一覧，<http://www.niigata-satokata.com/info/>，[最終閲覧日：2022/2/19]。
- 16) 新潟市：コミュニティ協議会だより，コミュニティ佐潟，<https://www.city.niigata.lg.jp/nishi/torikumi/com/com/sakata/com.html>，[最終閲覧日：2022/2/19]。
- 17) 新潟市：コミュニティ佐潟，活動計画・実績，<https://www.city.niigata.lg.jp/nishi/torikumi/com/com/sakata/katsudo.html>，[最終閲覧日：2022/2/19]。
- 18) 新潟市西区：西区自治協議会，<https://www.city.niigata.lg.jp/nishi/torikumi/jichikyogikai/index.html>，[最終閲覧日：2022/2/19]。
- 19) 新潟市西区：佐潟水鳥・湿地センター，<https://www.city.niigata.lg.jp/nishi/shisetsu/yoka/sakatashicchi.html>，[最終閲覧日：2022/2/19]。
- 20) 新潟市：佐潟通信，<https://www.city.niigata.lg.jp/kurashi/kankyo/hozen/shizenfureai/sakata/tuusin/index.html>，[最終閲覧日：2022/2/19]。
- 21) 新潟水辺の会：新潟の水辺だより，<https://niigata-mizubenokai.org/mizubenews/>，[最終閲覧日：2022/2/19]。
- 22) 佐潟と歩む赤塚の会：Facebook，<https://www.facebook.com/sakatatoayumu.0/>，[最終閲覧日：2022/2/19]。